

40年間を通して、日本占領期と日本軍による残虐行為の記憶についても、米比戦争とある意味で同様の忘却のプロセスが進んできた事実を見逃すことはできない。その背景には過去40年の日比間の——米比関係と相似した——非対称な権力関係があったと言わざるを得ない面もある。ここにおいて、米比と日比というふたつのレベルの植民地責任と戦争責任が重層的に絡みあう関係として、ふたつの戦後60年にはさまれた過去約40年の展開を捉え直す意味もあるのではないだろうか。(中野聡)

プロジェクトの最終研究会となった当日は、上記報告の後、3年間の総まとめとして、各自から感想や意見を出し合い、共同研究の到達点と今後の課題について議論した。

まず何よりも、本プロジェクトで提起した「植民地責任」の概念が、植民地主義（および奴隷貿易・奴隷制）の過去をめぐる近年の各地での動きを歴史学の問題として受け止める上で有効なものであるとの実感をメンバーが共有していることを確認した。具体的には、①「戦争犯罪」や「ナチ犯罪」をめぐる従来の議論が「植民地責任」論に有益な手がかりを与えてくれるばかりでなく、それらの議論の中で、植民地主義の歴史が現代的な問題としてとりあげら

れるようになった経緯が浮き彫りになってきたこと、したがって両者の関係と相違を多面的に明らかにしていく作業が引き続き重要であること、②「植民地責任」は脱植民地化を当該地域に生きる人々の主体的な歴史意識・歴史認識に即して理解するための概念であり、その点からすると、植民地主義と不可分の関係にある奴隷貿易・奴隷制の過去をめぐる今日的議論に歴史学がどのように取り組んでいくかがいっそう重要になっていること、③前記の意味での「植民地責任」論のためには、脱植民地化そのものの歴史過程を従来よりも多面的に考察する必要があること、④ジェノサイド、「民族浄化」など、現代の他の「大規模暴力」「大規模人権犯罪」との連関と比較の中で、「植民地責任」論をより普遍的な議論へと広げていく可能性があること、などが論じられた。

今後の予定としては、同名の科研プロジェクトの報告書の形で本研究の成果をひとまずまとめ、それを相互に検討しあった上で加筆修正し、出版用の原稿の準備を進めることになっている。また、本プロジェクトの後継プロジェクトとして2007年度より発足する「脱植民地化の双方向的歴史過程における『植民地責任』の研究」において、新しいメンバーも加え、研究をいっそう深化させたいと考えている。(永原陽子)

❖共同研究プロジェクト❖

タイ文化圏における山地民の歴史的研究

平成 18 年度第 3 回研究会

【日時】2006年9月30日(土)午後2時から午後6時

【場所】AA 研セミナー室 (301)

【報告】

1. 樫永真佐夫 (国立民族学博物館)
「他者として表象される山地民-ベトナム西北地方の黒タイ研究の視点から」
2. クリスマン・ダニエルス (AA 研)
「来年度に向けて」

【報告の要旨】

1. 他者として表象される山地民

—ベトナム西北地方の黒タイ研究の視点から

東南アジア大陸部におけるモン・クメール語系やチベット・ビルマ語系などの山地民の実証的な歴史研究を困難にしている要因として、彼ら自身が書き残した文字資料が非常に少ないことがある。しかし、彼らの文化や社会の考察のヒントになる記述が皆無であるわけではない。たとえば東南アジア各地で彼らは、前近代まで盆地の支配民であったタイ系民族に政治的に従

属していたために、盆地民側の年代記をはじめとする文字資料に、彼らの文化・社会・歴史を考察する手がかりを得ることはできる。そこで本発表では、ベトナム西北地方の盆地民の一つ黒タイが、サーと呼んでいる山地民集団を、年代記や慣習法の文書の中でどのように表象しているかを取り扱っている。

20世紀に至るまで、黒タイは盆地ごとにムアンとよばれる政治単位を形成していた。サーの人々は黒タイの先住民として認識されている。しかし、灌漑水田耕作にとって条件の悪い扇状地上部に住まわされ、ムアンの階層的な政治組織の中で半隷属的な地位におかれていたが、一定の役割を負ってムアンの儀礼にも参加してきた。こうしたことを背景に、前近代にはすでに言語や文化の面で黒タイへの同化が進んでいた。本発表では、黒タイ文書を中心にサーの先住性、(竹細工など) 専門家性、黒タイへの従属性を具体的に示した。次いで、ベトナムにおけるサー研究史を回顧し、民族政策との関連でサーと呼ばれている各民族の文化の実体化が研究者によって進んでいる実情を指摘した。さらにサー研究の限界として、これまでのサー民族誌が、黒タイ語やベトナム語によるインタビューに基づいたものばかりであることを挙げた。急速な社会変化が進む現在、サー村落における聞き取りは急務であるが、現地調査をする上での手続き上での困難と、調査言語の困難がつきまとっている。(榎永真佐夫)

この度の発表は、7月に開催された本年第二回目の研究会の討論において指摘された意見に対処するために企画した。本プロジェクト立ち上げ以来行なわれた発表で、山地民が残した史(資)料だけでは山地民政権の歴史的な性格を明らかにする手法には自ずと限界があるとの指摘があり、他者の目には山地民がどのように映し出

されているのかという視点から検討してみるものになったものである。榎永氏は、盆地に住居する黒タイが、先住民と見做している山地に住むサー(Kha)と呼ばれるモン・クメール系やカダイ系の言語の話者を取り上げ、他者の黒タイの目にサーがどのように映るのかを検討している。同氏は地理的位置、社会階層秩序、婚姻、経済、儀礼など多面から黒タイとサーの関係を明確にしようとした。

発表の後に行なわれた活発な質疑応答の中で、議論は黒タイとサーの関係は、タイ王国北部、ラオスやミャンマー(ビルマ) シャン州のタイ系民族とモン・クメール諸集団の類似点に集中していた。ムアン/パーが対立している点、タイ系民族が差し出す貢物の中には山地の産物が多い点、経済交流においてタイと山地が密接な関係を保持した点、及びタイ年代記にタイが先住民のサーやカーを征服したことを記している点などである。(唐立)

2. 来年度に向けて

ダニエルスのほうから、本年度の研究会の成果と問題点について説明した後、共同研究員各自からは来年度取り上げるべき課題や新しい共同研究員の人選などについて意見が出され、活発な議論が交わされた。来年度は、本年度一回目の研究会で決定した山地民の政権、文字の実践、植民地支配とエスニックアイデンティティの創出、及び上座仏教の歴史的役割という四課題を引き続き検討すると同時に、以下四つのテーマを加えることが決まった。

- (1) 他者の目から見る山地民
- (2) タイ文化圏の文献史(資)料
- (3) 民族(俗)学者が山地民をどのように記録してきた
- (4) 上座仏教と山地民の関係

(唐立)